

その後間もなく彼の歐洲の大戦になりまして、宮内省よりはなるべく外國品を用ひず、國産品を使用せよといふ省令が出た當時、或る時私(下田歌子)は陛下に謁見いたしました時に『所で井上知事から斯ういふことを承りました。私などは一向に承りませぬのに、却つて知事から聞かされました。今宮内省の考で、國産奨励といふことになりましたさうで御座いますが、陛下が、豫てから國産品を御召しになられたことは、洵に陛下の先見の明と申す外は御座いません。その事を拜承いたしますと、平生何氣なく舶來品をつい使用して居る私共は、何とも申譯のないことで御座います』と申し上げましたところ、陛下には『井上知事がそんなことを申したか』と如何にも御謙遜の御氣色にて、暫時御詞もありませんでしたが、更に『併し一般のものが輸入品を使用するには餘儀ない理がある。廉價で質のよいもの廉價で見かけのよいものであれば輸入品を使用するといふことも、今回のやうな非常の出來事があつた場合の外は、已むを得ないことであらう。しかし自分としては、何も廉價であるなしに拘る必要はない。もと／＼日本品が危悪だとすれば、それ丈けまだ日本品が進歩してゐない證據である。故に若し日本品が不十分であると思つたならば、互にそれを注意し、忠告して善くなるやうに仕向けて遣したいものである。さうすれば日本

品も漸次良くなつて來るであらう。しかし輸入品が良いとか廉いとか、日本品が高いとか、これは自分の衣服裝飾品等に就いて言ふのである。況んや國家社會の進運に就き、是非なくてはならない品は、無論輸入に俟たなくてはならぬであらう。故に又我よりすべき輸出品を完全に交換すればよい話である』といふ意味の御言葉を伺ひました。

それから又御養蠶のことに就て仰せらるゝには『自分が毎日養蠶所に行くやうに他から云はれて居るが、實はさう毎日必ず行つて居る譯にも參らぬ。で少しばかり御自分の御坐所の方にも飼はせられてある』との御仰せによりそれを拜觀いたしますと、何れもその蠶は美事に生立つて見えました。ところが、その退出がけに、私は御廊下の所に尙幾つも別々の小數入つづ蠶籠がありますので、それを伺ひましたところ、陛下には『あれは病兒である。普通の養蠶では病兒は川へ落すといふことであるが、それは已むを得ない無理ならぬ事である。しかし自分の養蠶は云はゞ慰みの爲に飼つて居るのである。折角宮中で生れたものを病兒を得たからとて捨てるには忍びない。故に病兒は隔離して、他へ病の傳染せぬやうにして置いたので、あれは即ち病院に居る患者のやうなものである。そして彼等の天壽を全うせしめてやりたいと思つてゐる』と申す意味を伺

ひましたので、私は洵に昔の人が天恩禽獸に及ぶと言つたが、あの病蠶も病院に入れて戴いて天然の壽命を全ふすのかと、實に畏こさに感極まつて申すべき詞も覚えませんでした。

それから、暫くしてからの事でした。一日陛下に拜謁いたしました時に、丁度御養蠶で出来た繭が澤山撒ばつて御前近くに在りましたのを拜しましたので、以前の病蠶の結果のことを伺ひますと、陛下の仰せられるには「あれはどうかうか、七分通りは繭を作つたが、それもその大部分の繭は全く形ばかりのものであつた、が極少数は存外立派な繭を作つた」との仰せで、其の繭も拜見させて戴きました。又更に仰せられて「それにつけても思ひやられるのは、人の子を教へるのも全くその通りであらう。不良兒を教育するのは、恰度蠶の病兒を飼ふやうなものであらう」との御言葉でありましたので、私自身、教育に携つて居るので陛下のその御恵み深い御心に全く涙を催す程恐れ入りました。陛下の大御心を悲察し奉れば、定めて日毎の新聞紙上にも顯はれて居る不良少年子女の事を御心にかけてせられて、もつと教育の任に當つて居る者が注意して遣つたら此の病兒のやうに救はるゝこともあらうと思召されるのであらう。まだノゝわれらの教育は行届かぬ不十分の事と恐懼慚愧してさしうつひておりました。下には「併し、普通學校は特別の者

を特別に教ふることは、學校は感化院ではないから、勿論出来得べき筈でない。我が目から見れば、執れも可憐なる愛兒（即ち國の母なる御立場より）である。どうか彼等にも可然救ひの手があらまほしいものである。人の親として子を思ふ心は誰も同じことであらう」との意味を御洩らし遊ばされました。最早大分時もたつたことであるから思召を細かに其の通りにお話することの出来ぬのを、恐懼し且つ遺憾と致しますが、大體に於て思召の存する所は前のやうに記憶致します。（皇室の光輝所載歴代皇后宮の御坤徳）

一八 傷痍軍人を痛みたまふ

くるまひく人のつかれを思ふかな

花をたづぬる道のとほさに

（明治二十三年）

車曳く一賤の男にさへ限りなき哀憫を感じさせたまふ皇后宮が國のため、天皇のために敵弾

に傷つき、或は病魔に苦しむ将卒を思はせたまうては、如何にこれを悲しみ、同情あそばされたかは全く感泣の外にないのである。

ふりつゞく雨をいぶせみ窓とちて

御軍人をおもひやるかな

(明治二十八年)

西南戦役に際して

皇后宮の傷痍軍人に對する御思召は、明治十年西南役から拜せられる。この役中、戦のために傷つたものが、續々と大阪臨時病院に輸送されることを聞召された皇后宮には痛く御心配あそばされて、畏くも時の陸軍軍醫總監松本順を召されて「この際治療のために最も多く必要なものは何にか」との御尋ねがあつた。松本總監は恐懼して傷につける綿撒糸(ガーゼ様のもの)が最も必要な旨を奉答すると、皇后宮は直に女官を陸軍省に遣はして、その製作法を學ばしめられた。女官は習つて來て、宮中で綿撒糸を作る事になつた。始め皇后宮はそれを御覽あそばされてゐたが遂には御躬から英照皇太后宮と共に御製作あそばされて、それを臨時病院に下賜されることとな

つた。當時大阪臨時病院長であつた石黒忠恵は、この有難い御思召を患者に申し聞かせてこれを頒け與へたところ、一同大いに感激し、これを包んでその趣を書き添へて、家へ送つて家實とせしめたものもあつたといふ。(明治大帝所載石黒忠恵子談話)

日清戦役に際して

日清戦役に於ては、傷病者を思召される皇后宮の御心は一層痛切であらせられた。

先づ最初に思召されたのは、消毒繻帯の御下賜であつた。それで侍醫を陸軍省に遣はして、繻帯の種類または製作上の心得など詳細に御下問あらせられ、宮中の一室に繻帯製作所を設け、親しく近侍の女官共を御督勵あそばされて製作に従事せしめ、御躬にも亦看護婦と同じく白衣を召し、消毒あそばされ、日々その製作にいそしみたまひ、時としては、早朝より夜の十時に及ぶまで休ませたまはぬこともあつた。かくて御調製の繻帯は直ちに豫備病院及び戦地の野戦病院等へそれ／＼下賜したまうた。

冬期になつては皇后宮は深く出征將卒の寒氣に惱むを御憂慮あそばされ、この年大婚二十五年

の御祝典に際し、各地の人民より奉獻した真綿の、そのまま御藏に貯へ置かれてあるものを取出し、悉く出征軍人に下賜あそばされた。皇后宮大夫香川敬三は、次の達を陸軍省に回附した。

拜啓、然者、先般被爲行候大婚滿二十五年御祝典之節、各地人民より献上相成候真綿二十八貫目、戦地出張の軍人防寒の爲、皇后陛下思召を以て、下賜の旨御沙汰に付御廻し申候條、可然御取計有之度、此段申進候也

また、明治二十八年一月十九日には、今回の戦争にて負傷または凍傷のため手足を失ひたるものに、人工手足即ち義手義足を賜ひ、その費用は御手許金を以て支辨あそばさるる旨を仰出され陸海軍省に達せしめられた。その後臺灣土匪勦討のために負傷した軍人軍属にも御下賜あらせられた。當時これ等のことの衝にあたつてゐた、石黒軍醫總監は次のごとく謹話してゐた。

病院御巡視の後（廣島野戦病院）特に私を召されて

各室を見舞つて見るに手足を失つたものがなか／＼多いやうに見受けるが、いかにも不自由で氣の毒に思ふ、何とか工夫はないものか

との御尋ねがあつた。そこで私は義手義足のあることを申しけたところ

そのやうなものがあるなら早速手元から義手義足を遣はしたいから衛生部で作るやうにと有難い仰せを賜はつた。しかもこの恩賜の義手義足はたゞに我が國の兵士に賜はりしのみならず、手足を失つた敵國の捕虜にまでも下さつたのである。

石黒總監の話には、義手義足下賜の年月日が事實と一致せぬことがあるやうだが、かやうのことがあつたことは拜察されるのである。さて、かくしてこの役に下賜された義手義足の数は百五十餘に達したが、年を経るに従つて稍々破損し、或は體にあはぬものも生じたことであらうと慮りたまひ、これを修理改造して取らせんと思召され明治三十五年九月、陸海軍大臣に旨を傳へ、軍醫に熟練職工を附し、必要な材料を携へて各師團管内に派遣せしめられたと當時の新聞は報じてゐた。石黒子爵は、このことを次のごとく語つてゐる。

日清の役から八年の月日が経つた。それは明治三十五年の五月、時の皇后宮大夫香川（敬三）伯爵は、私に次のやうなことを話された。

この頃、皇后陛下の仰せには「人は年齢を取るに隨うて、身體の工合や屈曲の度も變化して來るものであるが、曩に二十七八年役に於て、石黒に言うて手や足を失つた不自由

なものに義手義足を與へておいたがそれから早や七八年にもなる。嗚かし身體に合はぬものも出来たり、毎日使つて破損したものもあるであらう。よく調べて工合の悪いものは新しいのと取替へてやるやうにしたいと思ふが、その取計ひをするやうに」とのことである。貴下は時の野戦衛生長官として、初めから關係せられたこと故特にお知らせして置く。

皇后より義手義足を下賜されるといふことは、これまで、我が國はもとより外國にも例のないことで、しかも敵軍の兵士にまでも賜はるといふことは、洵に仁慈の極である。しかも八年前のことを思ひ出したまうて、これを修理改造しつかはさんとの思召は、全く慈母の愛兒を思ふ情であつて洵に、恐懼に堪えないものがある。

傷疾軍人を病院に御慰問

皇后宮は、戦地より送還せられたる傷病兵を深く痛みたまひ、明治二十八年二月十六日、東京陸軍豫備病院に行啓、親しく傷病兵を慰問したまうた。皇后宮大夫香川敬三は、次のごとく、在

廣島の石黒軍醫總監に報じてゐた。

去る十六日、皇后陛下には豫備病院へ行啓遊ばされ、負傷者を一々御慰問遊ばされ候、患者の内には感泣の餘り聲を揚げ候者もまゝ有之候、小生等御側近く侍り終始落涙仕候、皇后陛下には乍例一一御懇に負傷の實況、負傷當時の事等被聽召上候故、患者も一同感戴候様子に被見受候、皇后陛下にも折々御涙を浮めさせられ玉ひしを拜見候、赤十字社病院にも戦地歸りの負傷者も參居候故に、引續き行啓遊ばさるべきやに候へども、東京はまだ寒氣甚敷、皇后陛下御風氣後の事、且つ貴君よりも其邊の御心附さも承居り候間、暖和に相成候迄、御見合せ願度と心得居り候、貴君御存知之通り、今に始めぬ御仁慈何とも申上様なく感涙の外無之候。

翌三月には廣島に行啓、普ねく傷病兵を慰問したまふこととなつた。三月十七日、皇后宮大夫香川敬三以下侍醫女官等を従へ、東京御發、名古屋及び神戸に御一泊、十九日午後五時五十六分廣島停車場に御着、大本營内の行在所に入御あらせられた。

皇后宮は、翌日より病院へ行啓の思召であらせられたか、石黒衛生長官は御不例後に數日間の

汽車の御疲勞を推察して、二日間の御休養を請ひたてまつつた。かくて三月二十二日午後一時行在所御出門供奉諸官を隨從し、廣島市小姓町陸軍豫備病院に行啓あらせられた。軍醫總監佐藤進の奉導にて樓上便殿に入御、奏任以上の職員に拜謁を仰付けられ、石黒衛生長官には、

特に昨年出兵以來全軍衛生の經畫に心を盡せしを嘉ぶ、尙盡力せよ

といふ御詞を賜はつた。それより、皇后宮は草刈病院長の御案内にて、第一に士官病室に入らせられ、在院士官患者の枕頭に立たせたまひ、一人ごとに、詳細にその病狀經過等を問はせられ、この後、尙篤と加養せよ

と篤き御詞を賜ひ、次いで下士卒の病室に互らせられ、重き患者には一々病狀を問はせられたる後に

早く快復して尙一層勤務を盡すべし

との御詞を賜はつた。その間、感泣した患者が起上つて、陛下を拜し奉らんとする者をば御差止あそばされ

起くるに及ばず大事にせよ

との御詞を賜ひ、尙患者の被へる蒲團を親しく御手にて撫でさせたまひ、患者に適ふや否やを試みさせたまうた。

次いで橋本歩兵少佐以下の創所既に癒え、復役して當地にある將校等に謁を賜ひ、御詞を賜はつた。その他、創所癒え歩行散步等に差支なき者は、皆病室を出で、歩廊の側に整列して居つたので、皇后宮はこれを御覽あそばされて

一同は名譽ある戦地に於て、傷病を得て歸りしも、今は創所癒え病治まり、斯く立並ぶまでに至れるを見て甚だ悦ばし、此癒えたる有様を故郷の父母兄弟等が見もし、聞もしたまはらばさぞ悦ぶなるべし

と仰せられて、御歡びの意を告げたまふた。

次に清國負傷兵の收養されてある病室を通御あらせられ、敵ながらも、國家のために負傷せる有様を惻然に思召され、暫く立止りたまひてこれを御覽あらせられた。香川皇后宮大夫は皇后宮の御心中を拜察したてまつり、捕虜患者に伺ひ

一同大切に療養せよ

と申聞け、通譯官をしてこれを譯し傳へしめた。聖旨を拜した捕虜患者一同は、皇后宮の方に向ひ、合掌して聖旨を感戴し奉つた。便殿に復御の後、佐藤軍醫總監を召したまひ、

病院には多數の患者を收容し、去年來篤く治療に心を盡したる其結果の善きを見て、甚だ悦ばし、尙此益々勉勵せよ

と、また、草刈院長を召したまひ

病院職員一同の盡力により、治療の結果能きを悦ぶ、尙皆々盡力すべし

と仰せられ、暫時御休憩の後還啓仰出され、午後三時行在所に還御あそばされた。この日同病院一同に御見舞品を下賜おらせられた。

尋いで、三月二十四日、午後一時行在所御出門、廣島陸軍豫備病院第一分院に行啓おらせられた。渡邊分院長の御先導にて、順次各病室を御巡覽おらせられた。既に全癒に近き者は皆床頭に直立して迎へ奉つた。これを御覺あそばされて御氣色殊に麗はしく

汝等追々全癒し、顔色も良く、此に立竝ぶに至れるを見て甚だ悦ばし

といふ御詞を賜はり、次に重症患者室に入らせられ、枕頭に臨みて

充分に治療を加へ、早く全快せよ

といふ御詞を賜はつた。次に外科室に入らせられ、多くの機械を一一御覽あそばされて、

病院にて最必要の手術室、此の如く完備するは患者の爲にも最幸にして殊更安心する

と仰せられた。

かくて各室を御巡覽おらせられ、第十二號室に入らせたまふた。この室は極重症の外科患者を收養せる所で、每一室に一人を入れ、每人に看護婦一二人を附けてあつた。皇后宮は一人一人に御慰問の御詞を賜はつた。聖旨に感泣した患者が起ち上つて、陛下を拜し奉らんとせしを御覽おらせられ、渡邊分院長に向はせたまひ

あれを早く止めさせよ、

と、これを制したまひ、患者に向はせられては

心靜かに療養せよ

と告げたまふた。それより更に第十三號室の内科重症患者を御覽、前同様の御慰撫おらせられた。第十四號室にて暫時御休息おらせられたが、ここで石黒衛生長官をさ召せられて、

寒さの時には、宮城の内にてすら屏風を立て廻はして寒さを防ぐに、滿洲の水雪に曝されたる上に、病のため斯かるベラック病院に在る兵士等の艱苦はさこそと察せらるるなり、有難き御詞を賜はつたので、石黒長官は、

軍人は豫てより其身體を鍛錬せるが上に、既に北清の嚴寒すら凌いだものであります。その上、廣島は氣候も暖かなる故、この寒さはなんでもありません。加之、各室とも寢具の用意が充分でありますから、何卒大御心を安んじさせたまへ、

と申上げた。皇后宮は長官の奏上を聞召され、殊に御安意の御様子であらせられた。また第一分院の二分の一は赤十字社救護員の受持であつたので、赤十字社醫員高橋種記を首め、醫員、看護婦、取締、持志看護婦等には、殊更に御通行がけに賜を賜ひ、また

昨年以來、能く其職務を盡したるを悦ぶ、尙自餘の者にも此旨を傳へよ

と、御詞を賜はつた。かくて各室御巡覽の後、便殿に復御あそばされたが、第一號室の患者等が御通過の後、尙列を正して寢臺の側に立直して敬禮しつつあるを遙かに見そなはせたまひ

斯く身を煩はして長く直立し居たらんには、病を重くするの懼れあらん心置きなく安臥せ

しひへし

と、告げたまふた。午後三時還御あらせられた。この日も御慰問品を患者一同に御下賜あらせられた。

三月二十六日には午後一時御出門、廣島陸軍豫備病院第三分院に行啓あらせられた。伊部分院長、草刈本院長の御先導にて、先づ第五號室に臨ませられ、患者を御覽あらせられ、伊部分院長に向はせたまひ、

彼等は最早顔色も良くなりたれば、誠に悦ばし

と、仰せられ、また

彼の患者等は、凡そ幾日を経れば退院することを得るや

と、お尋ねあらせられたので、伊部分院長は謹んでそれにお答へ上げた。それより順次各室を御巡覽あらせられたが、殊に重症患者には、

向後とも能く注意して治療を受け、一日も早く全快せん事に勉めよ

と、御告げあそばされた。これより軍夫の病室を御覽あらせられんと仰せられたので、伊部分

長は恐懼して御見合せあらんことを申し上げたが、皇后宮は御取上げなく、終に入御あらせられたこれ等の軍夫患者は概ね凍傷者であつて、手足腐爛し、歩行の自由ならざる者があるので、この室に入御の際には、病床に臥したまま拜迎し奉つた。何れも感激の涙に咽んだ。午後三時還啓あらせられた。この日も患者一同に御慰問品を賜はつたことは前日と同じであつた。

三月二十八日には、また午後一時御出門にて、廣島陸軍病院第二分院に行啓あらせられた。この日、降雨も御厭ひなく、豫定のごく加藤第二分院長の奉導にて各病室を御巡視あらせられた。半ば平癒したる患者の立並び居るを見そなはせられて、

皆々既に癒えて、立並ぶまでに至りしは悦ばしき限りなり、尙能く養生して全く健康に復せよ

この御詞を賜はつた。次に眼科室に成らせられ、銃丸の破片にて一眼を失へる者等を御覽あそばされて

さぞ、不自由なるべし

と、慰めたまひ、また、第一軍の雪中にありて、遂に夜盲となりて歸つた八人の患者には、

夜間さぞ不自由なるべし、能く加養せよ

と、慰めたまふた。次に脚氣患者にて床を離るること能はざる者には、枕頭に臨んで、一一發病せし戦地のことなど聞召され、

篤と療養せよ

と、告げたまふた。

最後に呼吸器病の重症者のみ收容せる室に成らせられんとしたまひしかば、石黒衛生長官がこれを御止め奉つたので、皇后宮は入口に稍々立たせたまひ、一一病者の憔悴せるさまを御覽あそばされ、

何れも軽からぬ容體なれば、篤と療養を加へ快方に向はんことを望む、

との御詞があつた。畏くも御眼には涙さへ浮べさせたまうたのを拜し、石黒長官以下悉く目をしばたいた。

それより御座に復させられ、特に伍堂軍醫正、加藤第二分院長、渡邊第一分院長を召させられて厚き御詞があり、また石黒長官には、

連日各病院を巡視したが、何れも清潔にして、萬事能く行届き居ることは喜ばし

との、御詞を賜はつた。そこで石黒長官は昨年出征以來、我が國の婦人が出征軍人、殊に傷痍軍人に對しては貴賤の差別なく、同様に熱心な取扱ひをなすこと、また身分の富まざる者までも職務に勉勵せること、日本赤十字社、殊に看護婦の功勞、或は廣島地方の婦人が軍隊の宿泊に盡力せること、外國婦人までが病院に盡せること等、詳細に御説明し、

かくのごときは、畢竟陛下御仁惠の餘風に因るものでございます。

と、上奏した。皇后宮は一一首肯したまうて

斯かる軍國の際に當り、婦人がかくも心を國事に盡せるは、誠に嬉しく思ふ

と、仰せられ、午後三時行在所に還啓あそばされた、この日も患者一同に御下賜品があつた。

三月二十九日には、小松宮妃頼子殿下を皇后宮の御名代として、熊本・福岡・小倉・佐世保の各陸軍病院に差遣して傷病者を御慰問せしめられた。頼子殿下はこの日宇品を發して、順次各地の病院を巡視し、具に懿旨を傳へて傷病者を慰問した。

三月三十一日には午前十時行在御出門、宇品港より第一吳丸を召させたまひ、午後零時五分吳

港に著御、鎮守府に御休憩の後、午後二時海軍病院に行啓、島田院長の御先導にて各病室を御巡覽あらせられ、戦闘患者には、

能く身を公に奉じ、傷を受くるに至る、療食の效を積み、速かに平癒せんことを望む

といふ御詞を賜はり、また平病患者には、

公務のため疾病を招く、能く治療を加へよ

と、厚き御詞を賜はつた。各室の御巡覽を終りて御便殿に復御の後、島田院長を召させたまひ、治療の功甚だ宜し、爾後益々盡力せよ

と、告げたまひ、午後三時鎮守府御出門、第一吳丸に乗御、還啓の途につきたまうた。

これ等、皇后宮の連日に互る陸海軍病院の御慰問は、實に國母としての洪大な仁慈の御思召に發したまうたことで、その懇切にし周到なる御心盡しには、親しく御慰撫を蒙つた患者はいふもなく、これを傳へ聞く者まで、感激の涙に咽ばぬものはなかつた。

日露戦役に際して

日露戦役に於ける 皇后宮の傷痍軍人に對する御思召は、一層深きものがあらせられた。明治天皇は、明治三十七年三月十七日、侍從武官陸軍歩兵少佐伊藤瀨平を陸軍廣島豫備病院に差遣し、傷痍病者を慰問せしめたまうたのを初とし、その後絶えず各師團の衛戍病院、或は戦地に差遣して優渥なる聖旨を傳へて傷病者を慰問し、また御菓子料等を下賜し、一人と雖も聖恩に漏るることなからしめたまうたが、かかる際、皇后宮の御思召も同時に傳達さるるを當とした。

獨り傷病者を慰問したまうたのみでなく、一般將卒の能く耐寒劫暑に堪へて、國家のために奮戦苦闘するを嘉みしたまひ、戦地には常に侍從武官や侍醫等を差遣して、その状を視これを慰問したまうた。かかる際にも、皇后宮は特に侍醫等を添へて御思召を傳へしめられた。

明治三十七年八月二十日、第三軍乃木希典が敵本防禦線の一角たる磐龍山西砲臺及び東砲臺を奪取した奮闘を嘉賞したまひ、侍從武官陸軍砲兵大佐宮本照明を差遣して、その勞苦を慰問したまうたときに、皇后宮は御使桂侍醫を同行せしめたまひ、聖旨と共に令旨が傳へられた。令旨に曰く、

皇后陛下にも、大元帥陛下と同様に、先般來炎熱の砌り、長々困苦缺乏に堪へ、容易な

らぬ善戦を繼續したる段深く苦勞に思召され、且つ傷病者に就ては殊更、御心に懸けさせられ、特に侍醫を遣はし、親しく創傷の模様を視察せしめらる、尙治療も加へて一日も早く全快せんことを望ませらる。

と、告げられ、天皇、皇后兩陛下及び皇太子殿下の御名を以て、清酒五百樽、海苔二萬帖を御下賜された。かくて、翌五日より七日に亙り、同武官一行は第一師團及び第九師團方面の野戦病院並に戦地定立病院を巡視し、聖旨及び令旨を傳へて戦傷者に御菓子料を下賜した。

また滿洲軍に對しては遼陽戦後、九月七日、侍從武官陸軍歩兵中佐伊藤瀨平を滿洲軍總司令部及び第一・第二・第四軍に差遣してこれ慰問をせしめたまうた。皇后宮は特に侍醫高階經本を差遣して傷病兵を慰問せしめたまひ、次の思召を傳へ、恩賜品を下賜された

炎暑の候に際し長時日に亙り、各軍の奮闘せし景狀を被聞召、將校以下の健康如何あらんと神慮を被爲惱、又負傷及疾病者一同を慰問すべしとの御思召を以て侍醫を被差遣

八月三十日には侍從武官陸軍歩兵中佐公爵鷹司照通を滿洲に差遣し、滿洲軍總司令部を海城に慰問し、天皇・皇后宮より總司令官大山巖及び總參謀長兒玉源太郎に酒食等を下賜された。

兩陛下の御沙汰に曰く、

二二八

滿洲軍各部ノ行動進捗セルコトヲ聞召サレ、是全ク總司令官ノ統帥宜シキヲ得タルモノト、
兩陛下ニ於カセラレテモ御満足ニ思召サル、目下殘暑ノ候、軍一同健康ヲ注意センコトヲ
望ム。

明治三十八年一月五日、 天皇・皇后宮は侍從武官長陸軍大將男爵岡澤精を滿洲軍・遼東守備
軍・韓國駐劄軍及び聯合義隊へ差遣し、各軍の現況を視察せしめ、その士氣を視察せしめたまひ
且つ將卒一同に慰問品を下賜したまうた。岡澤武官長は一月二十日東京を出發し、三十一日烟臺
に到着し、總司令官に御沙汰を傳へ、且つ御下賜の品を授けた。これより各地を巡察し、それぞ
れ御沙汰を傳へ、御下賜品を授けた。總司令官以下、聖旨に感激せざるものはなかつた。岡澤武
官長の慰問の辭は次のごとくである。

兩陛下には開戦以來、宵衣旰食宸襟を安んじさせたまはず、滿洲にある軍人どもが、日夜
困難を冒して、毎戦よく必勝の好果を奏するをいと満足に御思召され、御慰問のために我
等一行を差遣したまひたる次第なり。

かくて我等は此の御思召を傳ふると共に戦局の前途はなほ遼遠なれば、ますく奮勵して、
終局の目的を達せよとの御旨をも傳へ、且つ滿洲にある軍人どもが、いかに嚴寒や風雪と
戦ひつゝあるをも、親しく視察し來れよとの大命を奉じてまゐりしなり、また

皇太子殿下におかせられても同様の御思召なり、昨年以來
陛下には、非常の御勵精にて、尋常の年ならば、十二月よりは御居間に暖爐二箇を据ゑさ
せらるるが例なれども、昨冬よりは、それを一個減じさせたまひたり、されば、御左右に侍
ふ武官より玉體に恙あらせたまひてはとて、言上する所ありけれども、何の御答もあらせ
られざりしが、これは全く滿洲にある軍人どもの現狀を深く御想ひやらせたまひての叡慮な
るべしと恐察し奉るなり、また此の頃

陛下の詠み出でさせたまひし大御歌は、一として滿洲にある軍人どもの事に、聖慮を馳せ
させたまはぬはなし、畏けれども其の御製を拜誦し奉るたびにいかに大御心を軍事に注が
せたまふかを拜察し奉りて、我等は感涙の襟を傳ふを禁ぜざるなり

かく語りて後岡澤武官長は聲高らかに、左の御製竝に御歌を誦し奉りて、士卒に示された。

きたひたるつるぎのひかりいちじるく

よにかさやかせわがいくさ人

いかならむくすりすしめて國のため

いたでおひくる身をばすくはむ

山をぬく人のちからもしきしまの

やまとこゝろぞもとゐなるべき

石たゝみかたきとりでもいくさ人

身をすてゝこそうちくだきけれ

くにたみはひとつこゝろにまもりけり

とほつみおやのかみのをしへを

皇后宮の御歌

たゝかひのかちのたよりをさくことに

みいくさ人の身をおもふかな

たのもしきなにはあれともたゝかひに

かたてはやまぬやまとだましひ

國のためこゝろつくしてかちいくさ

いのるかうれししもの下まで

くにのためいたておふ身のうつしゑは

みるになみだどもよほされける

あて人も心あはせてくにのため

いたておふ身をもるよなりけり

これ等の御製御歌を聴いて、我が勇猛なる滿洲軍も、聖恩の深さに感泣しないものはなかつたであらう。

皇后宮の傷痍病者を痛みたまうたことに就いては、尙特に傳ふべきことが二三ある。その一は、明治三十九年三月二十六日征露役に關し、戦傷その他により失眼或は手足切斷等のものに義眼義

敷御下賜の御沙汰があらせられたことである。

今般征露事件ニ關シ、失眠又ハ手足切斷等ノ軍人其他ノ者へ、

皇后陛下 思召ヲ以テ、義眼、義手足下賜候旨、御沙汰被爲在候間、去ル二十七八年役ノ際下賜ノ例ニ依リ、思召貫徹候様可然御取計相成度、此段申進候也

明治三十七年三月二十六日

皇后宮大夫子爵 香川 敬三

陸軍大臣寺内正毅殿

次に特書せねばならぬことは、明治三十八年二月十五日皇后の御思召を以て、開戦當初より三十七年十二月三十一日に至る間に、戦地に於て傷痍を受け、若くは疾病に罹り、退役となつた將校同相當官准士官及び永久兵役免除となつた下士兵卒、並に各兵料各部見習士官千二百十四名に對して、白フランネル襯衣千二百十四枚御菓子料金三千五百九圓（下士一名金三圓、兵卒一名金二圓）を下賜して御慰問あらせられたことである。このとき寺内陸軍大臣より府縣知事へ左の達があつた。

今回ノ戰役ニ關シ、戦地ニ於テ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ兵役免除トナリタル者へ
皇后陛下ノ 思召ヲ以テ、襯衣一枚宛及御菓子料トシテ下士へ金三圓兵卒へ金二圓下賜候旨御沙汰被爲在候ニ付、別紙人名ノ者ニ對スル分送附候條夫々下附ノ上、思召ノ旨一般へ寫ト貫徹候様取計フヘシ

いまたえひいさの下より萬代を

うたふとさくに涙こぼれぬ

(明治三十七年)

一九 御晩年の御生活

おぼけなき君が喜のかしこさは

忘るしまなし老いにける身も

(明治四十三年)

御晩年の皇后宮は沼津や葉山の御用邸に在まることが多かつた。これは皇后宮の御健康を案じ

たまふ 天皇の御思召によらせらるるのである。皇后宮はここに厚き御恵に感泣しつつ、静かに御身心を養はせたもうた、天皇は絶えず侍従、女官等を差遣し、これを慰めたもうた。

たまものゝその品々に大君の

ふかきみこころこもるかしこさ

(明治四十三四)

明治天皇の崩御

この静けき御生活の破れさせたもうたのは、明治四十五年七月、明治天皇の御大患であらせられた。天皇の御惱重せたもうてから、皇后宮は寸時も御枕邊を去らせたまはず、御手づから水囊を取り、薬餌をすすめて御看護につとめたもうたばかりでなく、宮中百官を指揮して萬事を處理したもうた。大學教授中の學識經驗あるものを召して、侍醫の足らざるところを補はしめたまはんとし、東京帝國大學醫科大學學長青山胤通、同教授三浦謹之助の兩博士が拜診を仰付けらるるに至つたのは、全く御思召に出でさせたもうたのである。二博士の拜診によりて愈々尿毒の御症と決定された。

かくて、七月十八日には、旨を宮内大臣に傳へ掌典宮地嚴夫をして伊勢大廟に御惱平癒の御祈

願を捧げしめたもうた。嚴夫は二十日午後より齋戒沐浴して内宮に參籠し、皇后宮の御願文を捧げ奉り、更に外宮に參籠して御同様の祭事を執り行ひ、二十一日夜八時を以て終り、直ちに歸京復命し奉つた。かやうなる御赤誠も空しく七月三十日午前零時四十三分遂に崩御あそばされたのである。御大患の際に於ける皇后宮の御行動には、感激せぬものはなかつた。七月二十八日宮内大臣渡邊千秋はかう語つてゐた。

皇后陛下の御淑徳高く、御情思の濃やかに在らせらるる御有様は、天下萬民の模範と仰ぎ奉るべき所である。今回聖上の御大患以來、皇后陛下には御身を忘れて御看護に當らせられ、御手づから御薬餌をも御進めあそばさるるは勿論の事、大小となく女官其他に御指圖をなし給ひ、御休息あそばさるるは、僅かに一晝夜の中に四時間か五時間を出でないのである。(七月二十九日)

ある。(東京朝日新聞)

また、前宮内大臣田中光顯は、次のごとく語つてゐた。

皇后陛下に於かせられては纖弱き御體質なるにも拘らず、數多の女官達を御指揮あそばされ、連日連夜御一睡も召させられず、御同様に御介抱申上げられ、特に御褥をも召させら

れず、御疊の上へ坐らせられて御在しますを拜し奉るに至りては、誠に恐懼の至りなり、又皇后陛下は、各親王方と共に時々西瓜水を以て、先帝の御口を濡らせ給ひしが如き、

實に恐れ多き次第なり。(八月一日東京朝日新聞)

崩御前後に世上には、皇后宮には餘りに烈しき御看護に御疲れあそばされ、御假床につかせられたとの噂があつたので、宮内省は西郷侍醫の談話を以て、これを取消さしめたが、西郷はかういつてゐた。

陛下御不例中に於ける、皇太后の御淑徳は、實に拜し奉るだに恐懼の至りにて、日々二三時間の御睡眠を取らせらるるのみ、斯く御身體に障る様の御事ありてはと、屢々岡侍醫頭より御休息を奏請したるも御用ひ遊ばされず、御枕邊にて只管御介抱あり、連日の睡眠御不足と御心痛とは壯年の者と雖も、其疲勞は推して知るべし、されば皇太后には御老體の御事にはあり、御疲勞さこそと拜し奉る。されども勿論一時の御疲勞にて夫が爲め、御不例に渡らせらるる様の御事なく、其後も引續き早朝より深更迄御棺側に侍し給ひ、一日の如きは夜十二時初めて御寢所に入らせ給へる程なり、尤も終始吾々は御側に奉侍し居るに

非ざれど御寢所に入らせらるる時は、一々御觸れある慣例にて、其時刻に依り推し奉るも連日深更迄御詰めあり、又々日々拜診し奉れる處によりても毫も御不例の御事なし、

(八月三日東京朝日新聞)

侍醫の語るごとく、御異例の世評は幸に誤謬なること明かにされたが、しかし、御大患中の御看護、崩御後の御通夜と引續ける御辛勞には、皇后宮の御疲勞は著しかつたことが拜せられたのである。前宮内大臣土方久元はかう語つてゐた。

予は昨日も參内して、皇太后陛下の御機嫌を伺ひ奉りしに、決して御病氣にはあらせられざるも、何分永の間の御看護と御通夜とにて御睡眠御不足に在らせらるるより、一時は御見違ひ申上ぐる迄に御面窶あそばされしを拜して、御心の中を推し奉り思はずも老の眼に熱き涙の溢れたり、御通夜は皇太后陛下を初め奉り、數人の女官等は神靈を奉安せる殯殿に、又一間を隔てて侍従と近衛の將校は晝夜交るゝに奉侍せり。

二〇 坤 德 拾 遺

御婦道を示したまふ

明治九年六月二日、皇后宮は三條太政大臣その他の人々と共に、御巡幸を千住驛まで御見送りあそばされ、御別れを惜しみたまうた。當時は末だ男尊女卑の風去らず教育あるものも、徒に男女の別を云々して、夫婦の愛を人に見せることなどは、賤しとせられたときであつたので、皇后宮のこの擧は痛く御奉送の人々を驚かし、文明國の夫婦の間はかくあるべきかと感じさせたらしく。供奉の近藤芳樹翁は、この感激を次のごとく記してゐた。

けふしも夏の空ともみえず、いとどかに、あまつ日も光をそへて、みちびかせ給ふにやと思ふばかり、御輦を照し給へれば、みちもさりあへず立さわぎし賤の男、しづのめも、さすがにかたへに伏して、みかどと皇后と別れさせ給ふさまを拜み奉る、ふるくよりよか

らぬならはしありて、夫婦の間うとくしくするを禮のごとくみな人思ひなしたりけるに、皇后のかくみやこ離るる所までおくり出させ給ひて、おほん袂もわかちかたきまで、ねもころにおほんわかれの情を盡し給へるを、はるかに見送れるをとこ女、みな面を見合せてげに高きもひきさきもかくてこそまことのなさはそのうちにこもりたりけれ、と感じおもはぬ者はなかりけり、あはれ民の父母とおはしまして世を導き、おもむかしめ給ふ事は、言の葉のうへのみにはあらで、かかるみかたちの様にてもしるさわぎにて、此みゆきにつけてもしらるればけふはおのづから、天と地との間に和氣わぎをふくみたるこちす。

ひばりすら道のしばふにありしきて

こゑをもたてすみゆきまつなり

老學者近藤翁すら、天と地との間に和氣をふくみたるこちすといつた程感激にうたれたことであるから、奉送市民の感激はいかばかりであつたであらう。當時の東京曙新聞には、次のこと書いてゐた。

正午十二時北組横尾龍助(舊本陣)が宅へ、着御あらせられて晝の御膳を奉り、御見送り

の方々并に埼玉縣令等御座所へ候して天機を伺ひ奉らる、扱午後二時頃、同所御出立の折、皇后宮御歩行（女官六人附添奉る）にて龍助が宅を出御、向側に立せられて御暇申させ給ふに、いかに御名残りを惜ませ給ひけんとかしこくも押量り奉るばかりなん……
斯くて二時三十分頃、皇后宮は御馬車にめさせられ、山岡大丞始め宮内省の官員方供奉せられて還御、其他御見送りの方々も引續て歸られた。横尾龍助より皇后宮へ花菖蒲、姫百合の花を献上せしに還御の車におもたせあそばされたのであつた。

宮中の御生活

子爵藤波言忠は、明治天皇の御學友として出仕し、長じて侍従となり主馬頭として長く宮中に奉仕し、皇后宮にも厚き御信任を得てゐた人であるが、皇后宮には、非常の敬畏を拂つて居られ我々にも皇后宮のことを能く話されたが、その一端にかやうのことがある。「皇后宮には、御部屋にて朝の御身始末後洋服を召させられ、常の御座所に出御あそばさるるが、夜の御引けまでそのまま御服を改めさせられない。しかも、御椅子を用ひさせられないで、洋服のまま絨毯の上

御座りあそばし數十年一日のごとくさやうあそばされた。それで、あるとき、近侍のものが御洋服のままでは恐れ入るからとの意を言上したるに、皇后宮は、いや、別に苦しとは覺えないと仰せられたといふ御話がある。

最も、天皇にも御朝食後洋服を召させられ、表御座所に出御の間は勿論、入御の後も御退けまでは洋服を脱がせられたことはない。但し常の御座所にも、主上御所用の椅子、テーブルがあつて、主上は御不例のときに、白羽二重の蒲團を用ひさせらるることき場合を除く外は、大抵椅子に御かかりあそばされた。かやうの御服制なども一度御決定あそばされたものは、飽まで御殿守あそばされるといふのは、天皇・皇后共に御同様であらせられた。

皇后宮は、主上の御西前にては、決して座蒲團などを御用ひあそばされたことはなかつた。主上より御使のとき、例へば皇后宮が沼津御用邸に在はしますとき、侍従を以て御菓子など贈らせらるることがあると、皇后宮には座蒲團のままにて御使の口上を受けさせらるるやうのことは決してなく、必ず座蒲團より御下りあそばさるるを例とされた。

日清戦役の還御の途次、天皇・皇后宮は俱に静岡の大東館といふ旅館に御泊まりあそばされ

た。天皇が御先きに御泊まりあそばされ、日を隔てて、皇后宮が御出でましになつたのである。このとき供奉の方々は、天皇の御泊まりの御室に御案内申すつもりであつた。他には特別の御室もないので、當然のことと思つてゐたのである。それを申上げると、皇后宮は、「天皇陛下が御寝みあそばしたところに自分が寝るといふことは出来ぬから、外に變へよ」と仰せらるるので、侍従が非常に恐縮して、いろいろと申上げたが、どうしても御聴きにならぬ。これだけは私といふ通りにして、外の所にして呉れと、とうとう次の間に御寝みあそばされた。その間といふのは普通の御客の泊まる八疊にさへ過ぎぬ室であつた。』

かやうの御恭順の御心は、皇后宮の常に變はらざるところであらせられた。嘗て、芝離宮にて管絃雅樂の御催があり、明治天皇の御製「四方の海皆兄弟」の短歌に節をつけたるものを歌唱吹奏せしに、皇后宮は着座のままを憚り、遽かに起ちて御聴きあそばされた。造次の間にも御敬意を忘れたまはなかつたのである。

明治天皇御集の編纂を聴したまふ

明治天皇崩御の後、御製をまとめて發表せられたい、といふ聲が頻りに朝野の間に起つたが、大官重臣の中には、天皇は御製の發表を御好みあそばされなかつたから、といつて躊躇する向もあつた。特に當時の皇太后宮は御同意あそばされぬと漏れ聞えてゐた。然るにあるとき、渡邊宮内大臣から當時御歌所に勤務の井上通泰に、明午前十時に參省するやうとの電話があつた。井上は、宮内官であつたが、至つて軽い役だからかやうの事は嘗てない事であつた。それで翌日、井上は宗秩察總裁で、御歌所長を兼任してゐた久我通久侯爵と共に、渡邊大臣の室に參つた。井上は大臣とも歌の交りがあつて、極めて親密であつたがその日はいつもに似ず極めて嚴然として皇太后陛下の思召を御傳へします。

先帝陛下は、御製の世に漏れることを御好みあらせられなかつた。たとへ發表するにしても一應よく調べて見た上でなければならぬ、世に漏れてゐるものの中には、古歌も交つて居るやうである。實に畏多いことである。兩人から一同によく注意するやうに

との仰せであつた。兩人は謹んで御受けして退出したがどういふところから、皇太后宮が、かやうのことを仰せらるるに至つたかは不明であつたが、いろいろ御歌所の人々の話を聴いて漸く

わかつた。それはその頃、〇〇〇〇といふ御製集が出版された、その書物の材料はどこから出たかまた御歌所員の中でも関係したものであることもわかつたが、その中に、さやうの御思召にたがふ様なものがあつたのである。それで久我總裁は、嚴重に所員を訓誡されたが、井上等は、皇太后宮の、

たとひ發表するにしてもよく調べて見た上でなければならぬ

といふ仰せには、絶対に御發表を拒みたまふのではない。調査整理のすまぬものの世に出ることを嫌はせたまうたからである。と付度し奉つたのである。それであるとき、井上は山縣公を尋ねて、この話を申上げ、何卒風教ためにも御發表御公刊になるやうに御盡力を願ひたいと請うた。かくて、山縣公の奏請となつて勅許された。

かくて臨時編纂部が成立されたのは、大正五年十月で、子爵入江爲守を部長とし、山縣有朋、徳大寺實則等を顧問とし、井上通泰以下八人を委員とし、大正八年十二月二十日編成つて奏上された。皇太后宮は、編纂部の成立をも見たまはずして崩御あそばされたが、その御意は成就されたのである。大正八年四月には、臨時編纂部は、皇太后宮の御集の編纂に従事し、大正十年十二

月二十日、編成つて奏上された。かやうにして、我々は萬世の寶典として、 明治天皇竝に皇太后宮御集二部を得ることになつたのである。

盲啞の學生を憐みたまふ

みるめなき浦わのあまも藻汐草

かきならふ世となりにけるかな

(明治十八年)

仁慈に溢るる皇后宮が盲啞の子弟を憐み、その教育の進歩を喜びたまうたことは、この御歌にも拜せられるが、明治四十一年七月八日、小石川白山の東京盲啞學校に成らせられ、親しくその學業を御覽あそばされ、御言葉を賜はつたことには校長以下生徒職員感激せぬものはなかつた。この日、皇后宮は校長小西新八の御先導にて啞生の綴り方、讀み方、盲生の讀み方、書き方等の教授の實況を御覽あそばされ、畢つて別室に陳列された圖書、裁縫、編物、刺繡その他を御覽あそばされて、その出來榮の立派なるに痛く御威服の御様子にて、校長以下の丹誠を御褒めあそばされた。更に盲生のピアノの彈奏、琴の合奏を聞召され、長くも屢々御目をしばたかせられたが、

小西校長に、

まことに不惑にも氣の毒なものどもである、今後とも能く氣をつけて導くやうに、との御言葉を遣し、諸員感激の中に還啓あらせられた。(大正三年四月 東京日日新聞)

俄雨に惱む小學生を痛みたまふ

明治三十年代のことと思ふ某女官の話に次のごときことがあつた。

ある秋の日、濱離宮から宮城に還啓の途中であつた。雨は極めて略式であつたので、御召の御馬車からは、市中の様子が能く見えた。ふと窓外を御覽あそばされると。俄か雨の中に、二三十人の小學校生徒が、先生につれられて道を急いで歩いてゐる。先生も生徒も傘一本も持つてゐないのに、雨は益々烈しくなり、いづれも濡れに濡れてゐる。皇后宮は俄かに御陪乗の高倉典侍をして主馬寮員に駐車を命ぜしめられた。主馬寮員が、何事かと驚き、早速下車して伺ふと、皇后宮は

いと幼なき生徒が、雨に濡れながら歩いてゐるのは、氣の毒であるから、馬車をここに駐

め、どこかで傘を調べて来るやうに

と、仰せらるので、主馬寮員は恐懼して、そのことを引率の教員に告げると、教員は、いや私の學校はもう直さそこでございますからと、辭退した。しかし、主馬寮員は、重ねて、皇后陛下の思召であるからと傳へると、教員も、生徒もその厚き御情けに感泣して、そのまま歩行を止め、附近の家の軒下に雨宿りをしてゐた。その間に主馬寮員と馬丁は附近の傘屋へ駆けこみ、漸くにして、數十本の傘を調べ歸つて、陛下の思召を傳へこれを教員生徒に手渡したので、一同は感涙を催して路傍に整列し御馬車の進み行くのを拜したのであつた。(東京日日新聞)

他人の權利を尊重したまふ

華族女學校長をしてゐた細川潤次郎は、眼前に拜した長き御心の發露といつて次の話をしてゐた。

嘗て上野に美術展覽會が開かれて、自分も亦これに關係してゐた。皇太后宮は同會に行啓あそばされ、種々の美術品を御覽せられ、香川大夫等に出品物に關する御下問があらせられた、その

内に一品頗る御氣に入りのものがあり、暫く御立留りさへあらせられた、香川大夫等は必ず御買上げの御意があらせらるるものと察し奉つたが、如何にせん、該品は既に賣約済の札がつけられてあつた。そこで何んとか賣買契約した人に話せばよからうと、内々そのやうに取運んだ、これをおきさあそばされた、皇后宮は、御機嫌を損じさせられた御模様にて、香川大夫をお呼びつけになり。

いかに氣に入つた品物なればとて、既に他人の物となつた以上、これを取上げようとする

やうのことは、決して爲すべきものではない、

との御言葉があらせられた。大夫は勿論一同は恐懼措くところを知らず、直ちにその輕率なることを申上げて謝罪し奉つたところ、過つて悔むる以上これを責むるときことはあらせられず、忽ち玉顔を和らげさせられ、

別に心配する程のことではないが、あのやうなことは今後はなされぬやうに、

と御訓誡を賜はつたので、一同は益々感激した次第であつた。これ等のことは、皇后宮の御慈愛の念深きと同時に、他人の得た権利を飽まで尊重したまふ有難き思召が伺はるのである。

御趣味と讀書

皇后宮の御趣味と拜察せらるるものは、初春の御樂には、女官等を御相手に楽しみあそばされたのは、古今集、新古今集、源氏などの骨牌遊びであらせられた。別けても源氏骨牌を愛したまひ、御手すから、五十四帖の名句を選ばれ、御筆を染めたまうた。屋外の御慰みとしては、春は摘草、御梅落し、夏は菜園の御散歩に、春の日培ひたまひし種や苗の、秋早くもたわわに實を結べるを御覽じて、御満足の程を、天皇御始め皇太子、同妃や皇孫たちに頒たせたまふことであつた。御晩年には、かかることもあらせられず、皇孫の御成人をのみ樂しませたまひ、沼津にあらせらるるや三四日ごとに必ず、玩具を送らせたまひ、お祖母よりと喜ばせたまふ御様子を遙かに喜ばせたまうた。

讀書には、最も深き御趣味を御持ちあそばされ、秋の夜長に、燈火を挑げて源氏を讀み耽りたまふ程にて、五十四帖の大巻物は殆んど、残りなく讀んじたまうた。歌書にては古今集を最も愛したまうたと承はる。されば、紀貫之に就いて、

昔今えらびし歌のはしがきに

みゆるは人のちからなりけり

(明治二十二年)

と、古今集の序文を賞したまうたことがある。

また源氏に就いては、次の御話がある。或る年、美術協會開催の美術展覧會に行啓の折、出陳の参考品の中に、尾州徳川家より出品の『初音の棚』といふのがあつた。これは巨匠三代幸阿彌の手に成つた精巧なものである。しかし、何故に『初音の棚』と名附けたるか、供奉の人々は判じかねて會の役員に問ひしが、知るものがなかつた。これを聞召された皇后宮は、そは源氏初音の巻の歌より取りしにあらざるかと仰せられた。これを承つた人々は早速この品の模様や文字を點檢せしに、果して『年月をまつにひかれてふる人はけふうぐひすの初音さかせよ』といへる源氏の中の一首が、歌繪にて描かれてあつたので、人々は皇后宮の御造詣に感歎し奉つたとは、時の美術協會副會頭細川潤次郎の語るところである。しかし、皇后宮の源氏を愛讀したまうたのは一つはその作者紫式部の人格を賞でたまうたのである。嘗て、

露ふかさみがさの内になさきながら

操たわまぬ女郎花かな

(明治二十三年)

と、淫蕩の平安時代に於ける、式部の貞操を賞したまうたことがある。

我が古典文學の外に、謠曲、唐詩、俳句、は申すまでもなく、江戸時代の草紙類なども御讀みあそばされ、種々御批判あそばされたこともあつた。

皇子皇孫を慈しみたまふ

昭憲皇太后宮は、不幸にして愛兒にめぐまれたまはなかつたが、皇子内親王及び皇孫を慈しみたまふことは甚しく、その間極めて和氣の霏々たるものがあつた。皇太子嘉仁親王に對しては、特に御敬愛の厚きものがあらせられた。明治十二年、皇太子の御降誕を歡ばせたまひて、

大君のみそののたづもけふよりは

二葉の松の千世にともなへ

と詠じたまうた。嘗て美術展覧會に成らせられ、種々の御買上品があらせられ、皇族や皇子内親王に御分與あそばされた。その中に童形の虞舜の畫の掛軸があつた。御附の人々の中に、何心

なく、これは某殿下に參らせられてはと申上ぐると、皇后宮には、

それは皇太子にこそ

と軽く御意あらせたまうた。これは歴史上の御見地から、この畫は他日九五の位に就かせらるべき方にこそふさはしからむとの御深意であらせられたと拜察されるのである。

かやうに、皇太子には特別の御注意あそばされたが、皇后宮の最も慮りたまふことは御健康であらせられた。避暑避寒にも特別の御注意をあらせられた。明治二十三年一月には熱海に御遊寒あそばされた。このときは曾我祐準が御養育主任で、元田永孚も供奉してゐた。この御遊寒は頗る効果があらせられたので、皇后宮は喜びたまうて、

ゆあみするあたみの里をあたたけみ

小松も千代の色やそふらむ

と詠じたまうた。

皇子傅育官長丸尾錦作は、大正三年四月、崩御當時かう語つてゐた。

『皇太后陛下が、東宮及び皇子殿下を御慈しみたまふことは非常のもので、吾々御養育の任

に當るものは、實に恐懼に堪へぬ次第である。されば、東宮兩皇子殿下も『御ばは様』と御慕ひあそばさるることは一方ならぬ、御幼少の頃から、御玩具の賜はりものは數多くいづれも、御大切に保存されてあるが、去四十三年であつた、沼津行啓中、折柄同灣内で、海軍の演習があつた節、砂白く松翠なる所に御座所を御設けあり、陛下には三殿下を御伴なはせられ、鯨鱸浪を衝き、砲火閃くの壯舉を親しく御覽あらせられたこともあつた』

この東宮や皇子のすこやかに御成長あそばすことをいかに御喜びあそばされたことか。三十七年の御歌、巖上松に、

大内の山のいはねにしけりゆく

小松の千代もみそなはすらむ

と詠じたまうたのは、この御意であらせらるる。

御母様慈母として

皇后宮の皇子内親王を慈しみ、その御教養に御心をしたまうたことは、前にも述べたごとく

極めて厚くあらせられたが、大正三年四月崩御當時の東京朝日新聞に、多年内親王の教育御相手をしておた某夫人の謹話として、次の話が載せられてあつた。

『陛下が種々の方法で、國民の學事を御獎勵あそばした事は今更繰り返す必要もございませんが、畏れ多い事ながら又様々の方法によりて内親王様方の御學業を御獎勵あそばしました。御心盡しは實に至れり盡せりであらせられ、それも御自身がお好きであらせられたからの御事と存じ上げます。』

先帝陛下も皇太后陛下もまだお若い時分の事でした。聖上陛下に元田侍講が御進講申し上げる時には皇太后陛下は必ず缺かさず御一語に御聴き取りあそばされ、就中洋書と物理化學などの御講義には深い御好みがあらせられましたさうでございます。そして、女官方にも特別の思召をもつて御陪聴をお許しになりました。こんな風でゐらせられました陛下には、内親王様方に對する御學問の御獎勵に細心御心添へあそばされたのも怪しむに足りません。

内親王様方が御幼少でまだ幼稚園に御出でになるやうな頃、御手工など遊ばす所を御覽になりたいとの思召で、態々新しい御机を御調べになつて御召しになるなどの事がございました。御手

習などもやはり其通り御清書は、時々黒塗りの菊の御紋のついたお清書箱に入れて姫宮様方から御母陛下にお使で御覽に入れられる事もございました。

それで、そのお褒めになる仕方、御獎勵になる方法が「ああもお氣がつくものか」と畏れ入るばかりでございました。御清書等がよくお出来になつた時は、硯箱とか、硯とか、筆とかまたお歌をお褒めになる時は短冊とか、色紙とか何でも學科學科に依つて御褒美が違ふのでございます。御病氣の時は開けて見て楽しむやうとお考へから、蹴鞠の形になつた中に種々の玩具の入つたのを御慰みに進ぜられました。

内親王様方のお召物は、大方御母陛下のお見立てで、お模様などは去年は何であつたから、今年は何と御自身お擇みになつてお誂へになります。聖上陛下が何か色物をお見立てになりますと、御自身では又それに適ふお色をお見立てになりました。

何でも人の喜ぶのを御覽になつては、お喜びになるといふ風で、姫宮様方のお喜びあそばすが、また此上ないお喜ばしい事のやうに拜しました。

聖上陛下が大演習でもお出ましますと、夜などは内親王様方を御一語にお招きあそば

されて、まあ下様で申せば一家團欒といった鹽梅で、お遊ばせやら、お物語やらで、陸ながら察し上げますと斯う美しい繪でも拜見するやうな心地が致しました。

お子様方から献ぜられる品々は一一お手に取り上げられて、お喜びあそばされました。御親子の間柄は誠にお近しうあらせられ、内親王様方へのお言葉は實に御叮嚀で、お美しうございました。お名をお呼びになる時も『常宮さん』『周宮さん』と仰せられ、決してお呼び捨てなどにあそばしませんでした。

先帝陛下が御重態であらせ給ふた間、御寢食もあそばされずに御看護あそばされましたが、さて崩御と申す場合には、それこそ一絲亂れずの御態度、お優しい平素の御心根が『うん』と云ふ時に、雄々しくも見上げられた御立派さを仰いで臣下の感佩は素よりでございましたが、内親王様の御胸に何かのお響きがあらせられたと首肯されました。

そして『御母様の御體にお障りがあらせられまいかと、お案じ申上げる』と、御涙と共に仰せられましたとか、これからは、お孫様方に何かとあそばすの許りがお楽しみであるとお仰せあられた相でございますが………明君の御偉業の御内助者であらせられた明皇后陛下の御逸話

は、御感心申し上げる様な事ばかりで何と取立ててよいか解りません』

御 信 仰

(尙、崩御當時の東京朝日新聞には照憲皇太后の御信仰として次の如く謹記してゐた。)

『今上陛下には御母陛下に、萬事御不自由おはしまさぬ様にとの御心遣ひあれど、皇太后陛下には大宮様となられし上は』との思召より御質素をのみ旨とし望ませ給ひしとぞ。

御信心あつき陛下には、御祖先を崇拜し給ふ御念別して深く、諸陵の御拜に親から出でましし事もあり、朝な／＼は伊勢大廟に向はせられての御拜愈らせ給はず。

日蓮宗にも深く御歸依の事として、御代拜を屢々身延山へ立たしめ給ふ事もありきと、先帝崩御させ給ひてよりは、朝々の第一の御拜は必ず先づ御眞影に向はせられ、桃山へも月々の御命日には御代拜を立てさせ給ひたり。

『近頃沼津御用邸にての御日々は法華經を寫して過させ給ひしとぞ承はる。其他蠶業に、教育に御奨勵の御心は汲みても盡さず、御徳竝びなかりし御佛こそ仰がるれ』

一一一 崩 御

明治天皇崩御、皇太子嘉仁親王が踐祚あらせらるるに於て、皇后宮は皇太后の尊稱を受けさせられ、大正二年七月に青山御所に移りたまふた。御所内の皇靈殿には歴代皇祖皇宗の神靈を奉祀されてあつたが、更に明治天皇の御靈を御迎へして、祖宗の皇靈と併せて御拜らせられた。別に常の御座所の一部に、先帝の御眞影を安置して近侍の人々の奉拜に便せられた。皇太后宮はここに先帝御在世の目を偲びまつりつつ、萬事質素を旨とせられ、御餘生を淨い信仰を以て送らせたまうた。皇太后宮は花卉類を好ませられ、特に牡丹を愛させられた。また狎を愛したまうたので、狎は能く人に狎れて御側を離れなかつた。しかし、伊藤博文夫人梅子は性犬狗を嫌ひ、見ると驚怖する習慣があつたので、梅子の伺候するときにはこれを遠ざけ、梅子には今日は犬が居らぬから心を安くせよと仰せ聞けられ、梅子を恐懼せしめたこともあらせられた。

また、沼津の御用邸に、能く避暑避暑あそばされた。先帝御在世中には、請にまかせて、華族大官の別荘等に御立寄りあそばさるることもあつた。明治四十二年六月三日前田利爲侯の鎌倉の別荘、聽濤山荘に行啓、御中食あり、謠曲、三曲合奏、長唄、勸進帳、少女の踊りなど御覽あらせられ、利爲侯夫妻及び母堂の心盡しの御接待に終日の歡を盡し、晚景御歸京あそばされたこともあらせられた。その前後にも、かかる御遊びもあらせられたが、先帝崩御後は一切かかることはあらせられなかつた。

大正三年三月、沼津御用邸に於て御發病あそばされた。近侍の人々、皇族一同の御手厚き御看護、國民の祈禱の功も空しく病勢次第に重らせられ、四月九日には天皇、皇后宮の御見舞を受けさせられたが、十一日靜かに先帝の御後をば追はせたまうた。御年六十五歳にましました。五月九日御坤徳に因み奉つて昭憲皇太后と追諡を上り、伏見桃山東陵に葬り奉つた。越えて大正四年五月その神靈は、畏くも官幣大社明治神宮に合せ祀らせたまうたのである。

御病狀御經過

(宮内省發表)

皇太后は豫て慢性氣管支加答兒及慢性腎臟炎の御疾患に在らせられし處、大正三年三月二十六日午後二時、俄然強度の狭心症を起させられ、引續き尿毒症御併發、二十九日午前八時稍輕き心臟機能の御障礙ありしも、漸次御輕快に向はせられ、爾後、尿毒症及び心臟機能の御障礙は漸く減退の御模様なりしに、四月九日午前一時五十分再び劇烈なる狭心症を發せられ、四月十一日午前二時十分、心臟痙攣に因り終に崩御あらせらる。洵に恐懼の至に堪へず（侍醫頭西卿吉義、侍醫相磯、森永、大谷、樺川、宮内省御用掛岡、青山、三浦拜診）

一二一 外人の拜したる昭憲皇太后宮

近時國史の研究にも外人の著作研究等がいろいろと参考にさるるやうである。私は國情を異にし、國家理念を異にする外人の著作研究を必ずしも必要とするものではない。しかし、外人の記述は往々我々の氣づかざる事、或はいはんとしていひ得ざることをツバ／＼といつて時に肯綮

に當ることがある。特に國史を世界史の一として觀察することに至つては、我々は他山の石として大いに傾聽すべきものがあることを思ふ、私はこの書に於ては外人の著作研究をそれ程にも評價するものではないが、その忌憚なき記述の中には、却て眞實を見出すことがあり、考へさずることもあるので、やはり他山の石として一顧の價値あることを思ふ。

オットマール・フォン・モール著『日本皇室』

一九〇四年伯林出版

この人は獨逸皇帝の侍從官であつたが、明治二十年から二十二年にかけ、夫妻ともに伊藤公によつて宮内省に招聘せられ、宮中の諸儀式改定の顧問となつた人で、日本人の長短を知り、つとめてその長所を保存せんとした人であつた。この人が日露戰役に於て日本が一躍世界の強國たらんとするを見て、在職中の思ひ出を書いたものである。モールは、先づ明治二十年春始めて、天皇、皇后兩陛下に拜謁仰付けられたときの感想を書いてゐる。曰く、

余等は是等式部官の案内により、廣き宮中を通過して謁見室に入りしが、やがて 皇帝陛下皇后陛下には御洋装にて出御あり、余は 皇帝陛下の御前に立ち、妻は皇后陛下の御前

に立ちて拜謁の榮を賜はりたり。

歐洲人の『御門』と申し奉る日本皇帝は御正稱を天皇と申し、宮中にては『御上』と申上ぐるなり、當時御齡四十歳に涉らせられ、黒き御軍服を召させられ（英國及舊ブラウンシュワイグ國の軍服の如きもの、御胸に菊花大綬章を佩ばせられ、御頭には何物も冠せられず、申すもかしこきことながら、少し黄がかりし御色合にて、黒き御髪、黒き御鬚を貯へられ御年よりは若やかに見上げられ、御目ばたきの外は少しも御動きなく端然として御直立あらせらる。

皇帝陛下に並び給ひし、皇后陛下は御長け高からぬ方にて、絹の洋服を召させられ、御姿麗はしく優れて氣高く、如何にも高貴の御方とこそ見上げられける。兩陛下には清き高音調にて極めて靜かに御言葉を賜はりしが、御傍に侍りし長崎式部官及北島女官は直に之を英譯して余等に御諚の意を傳へたり、余等が拜謁は凡そ二十分間に渡りていと有難き仰せごとあり、先づ伯林の皇帝、皇后兩陛下の御起居を問はせられ、次に皇太子殿下、皇太子妃殿下の御健康を御尋ねあつて遂に余等の旅に付き御言葉を賜はり、殊に皇后陛下には有

難くもそちの子供は如何せしやなど尋ねさせ給へり、此御物語中、兩陛下には、特に

皇帝陛下には少しも御威容を崩し給はず、御殿としては稍狭く薄暗き感ある、此御室の中央に直立し給ひて、一步をも移し給はず、又御手をも賜はらざりき。

皇后陛下には、他の高貴なる婦人の方々が總べて余等外國人に對し興がり給ふが如く、稍御活潑に渡らせられ、且は御なさけ深く慕はしき様をも拜しまゐらせたり。

この次に、モールは、天皇陛下と題し、明治天皇の御略譜からその御性格、御事業等を評論的に記述し、その次に皇后陛下と題し、皇后宮の御性格、御事蹟等を記述してゐる。その最初に次のごとく述べてある。

皇后陛下の玉姿すぐれて麗はしく入らせられ、其氣高き御ふるまひは歐洲帝の高貴なる方に喩へつ可しとは、既に記し奉る所なるが、此君には千八百五十年（嘉永三年）天地草木の装ひ、尤も濃かなる五月の廿八日を以て、うらやすの平安城京都に生れ給ひ、御諱を美子の君と申し上げまつる。君には人を憐むの御情と、世を知るの才とを兼ね給ひ、誠に宮廷の御魂にて、又御魂たるべき君なれば、皇后（ゲビータリン、知しめす女君の意）の

御稱號を奉りたり、御身の長は昂からず。やさしき方なれど、大和ぶりの御學と才とは、高く豊かにおはすとぞ承りぬる。歌、美術、本草學の御嗜み、これ君の時を過ごさせ給ふ御料なりとか。茲に余等歐洲人の奇しく考ふるは、斯程の君にましましながら、萬の事、側に侍る人々の力にのみ任せられつつ、特に皇后宮大夫と御侍従の婦人に全くよらせ給ふことにて、こは外目にもいちじるく思はる。恐らくは歐洲風を深く知ろし召し給はぬ、との御心づかひより、斯くはことさらおくれ給ふにや。そもまたむべなる哉、昔の日本の貴き女の君は申す迄もなく、なべて昔は表に出るを忌み給ひしにて、維新の改革このかた、始て歐洲の人々に接するの止むことを得ざるによりて、漸く公に出で來たまひしなりけり、されば今は心あるありて、人は夕つ日の西の國の帝后王妃を型として、其様をならひまねび給はんこと、これ切に望み給ふ所なりとか。獨逸帝の后普魯亞王妃アウグスタは日本の皇后陛下には其善き例なるべし。日本の皇后陛下が國民の教育に御心を注ぎ給ふこと、病者御扶助のこと、赤十字社を率ゐ給ふこと、外交の庭に出で給ふこと、東京の朝廷を音づるる數多き外國の王公貴妃に接し給ふこと、時勢人心の進歩を與からんと思ひはかり給

ふこと、およそこれ等を伺ひ奉れば皇后陛下の御心ばえの如何に尊く慕はしきかを知る可し。而して前にかかげつるは皇后の日に御心を注ぎ給ふ所にしていやが上にも其全からんことを欲して獨逸皇后の例など鑑み給ひしは誠に益多かりしことならん。一度皇后陛下の聖容を拜し奉るの幸を得たる人は如何に君の御慈悲深くましますか、如何に坤徳の變らせられざるか、如何に氣高き御心を備へ給ふかに深く感じて畢生忘ることなかるべし。… 偕、皇后陛下には、其坤徳の大なるによりて宮中舉て渴仰尊敬するの御身となり給ひし而已ならず、皇帝陛下が此^ニあり精神あり、名譽心ある國民を御し給ふに當りて、皇后陛下を此上なき内助と思し召し給ふに至りたり。(秘書類纂帝室
制度資料所載)

塙國新聞、ノイエ・フライエ・ブツセ紙所載の『日本皇后』

先帝陛下の皇后美子陛下と申すは一八五〇年(嘉永三年)の御生誕なり。最高公卿家の一に屬する一條忠香公の第三姫に在はす。一八六八年(明治元年)十二月二十八日御入内、即日冊立せられて皇后となり給へり。日本宮廷の御慣習に従つて、皇后陛下は決して國政に容喙し給へる事

なしと雖も、常時貧者病者、就中戦役廢兵に同情救護を與へられ、又藝術の御獎勵を計り給へり、而して皇后陛下御身も亦日本皇室第一の女流歌人に數へられ給ふ。今や陛下は第六十一回の御誕辰を迎へられ、即ち古代支那の思想に依れば、新干支に入り給ふを以て、此の御誕辰は英國先帝エドワード王の爲めの宮中喪御満了後、宮中に於て常よりも盛大に祝賀を行はせられたり。

文學者フエリクス・パウマンは「日本の少女」と題する書に於て皇后陛下并に皇太子妃殿下に關し記して曰く、歐洲に於ては日本皇后陛下の御尊甚だ稀なれども陛下は、日本國飛躍の基礎を作り給ひ、是をして現代的文明國たらしむるに就ても亦充分に其の御務を竭し給へりなり。

最近「ヘブドマデル評論」に記載されたる所によれば、陛下が無邪氣なる御妙齡の境遇を去り給ひて、日本皇后陛下の御位に上り給ひしは、御芳紀僅かに十八の時なりしが、天皇陛下の御心に磅礴せる新思想は、長く皇后陛下に感知せられざるの理なく、特に女性の鋭敏なる感受力によりて、陛下は極めて短小期間内に是等の御思想を攝取せられたり。陛下は御躬ら發意して、其後宮廷費を割きて五名の少女を合衆國に送られて新教育を受けしめ給へり。爾來陛下は決然として婦人教育に御力を注ぎ給へり。

一八七四年（明治七年）初めて高等女學校を設立せられ、それより帝國到る處に女學校の設立を見るに至れり。子女を家庭外に教育せしむる事は日本人の因襲的に嫌忌する所なりしが、其の傾向を變じて高等女子教育の一學校設立せられ、而して陛下は親ら此事業の御獎勵に御心を注ぎ給ひ、女官の一人は選拔せられて其の學校長となり。優良なる教員は歐洲より招聘せられたり。歐洲の思想は在來の日本思想と極めて調和的に巧に結合せられ、而も舊習は依然としてその尊嚴を失はざるを得たりしかば程なく世俗の僻見も排除せられたり、陛下は今も毎年數回この學校に臨幸せられ、學校は陛下の特別なる御保護の下に立てるなり。

斯の如き行啓の場合、其の他一般公式の宴會總會等に、陛下は洋裝を用ひ給ひ、特に鮮明なる色彩を愛好し給へり。陛下は日本婦人の爲めに新時代を作らん事を軫念せらるると共に、又貧民救護其他の慈善事業に厚き御同情と御助力とを與へ給ふ。貧民救護の組織を日本に創め給ひたる陛下の御効績は偉大なり。赤十字事業の發達も亦陛下の御獎勵と實際的御助力とを蒙れる事多し。

皇族方は民衆の會合に出席せらるる事稀なるを以て、世人が皇后陛下の御溫容を拜する事は極

めて罕れなり。外國人は離宮の觀櫻及び觀菊の御宴の際にのみ、其機會を得るを普通とす。

皇后陛下に關し最も適切なる記述をなしたるはラットマール・フラン・モール氏とビエール・ロチイ氏及びアメリカの文士エリザ・サイドモリア女史となり。モール氏は日本宮廷禮式師範の資格に依りて、幾度か皇后陛下に接近し奉るの機會を有したる人なるが、陛下を評し奉りて、最も秀麗卓越の御方と云へり。歐洲諸國の皇后に比し、座作進退毫も遜色あらせられずと言へり。

陛下は大なる御愛嬌と高き御見識とを兼備し給ひ、昔も今もその宮廷の御中心として單に「コー」とのみ呼ばれ給ふ。是れ尊き女皇の意なり。陛下の御玉體は纖少なりと雖も、毫も其の御品位を損せられず。その御教育は純日本式なれども甚だ高大にして、御閑の折には常に歌作、美術及び園藝を楽しみ給ふと云ふ。然れども、殊にモール氏を驚嘆せしめたるは、陛下が周圍の御境遇より受け給ひたる影響なりき。陛下は御專斷がましき事をば厭はせられ、多少宮内大臣及び女官等に依頼せんとの御傾向を免がれ給はざりしが、之其實一は歐風の行動に對せらるる御自身を謙徳以て、御不足と感じ給ふが故ならんか。舊日本の后妃は當時一般の婦人と同じく公會の席に出で給ふ事なかりしが、維新改革以來、歐洲的に公會に於ける婦人の斡旋的義務は漸次皇后

陛下の御身邊に加はり來れり。

されば御穎敏なる陛下の強き御希望は、「宮廷の生活法」を漸次歐化するにありて、多くは獨逸アウグステ・ビクトリア皇后の御日常を取て模範となし給へりと云ふ。而して國民の教育に關する御同情及び御助力、病者の御救護、赤十字の御獎勵、外交團及び比年増加する外國貴賓の來訪に對する御應對、現時のあらゆる精神的運動に對する御興味等は、日本皇后陛下御活動の主要なる部分を成せり。之れ皇后陛下として御職務に關する御活動にして、陛下は此の方面の知識を求むるに御熱心なるを以て、又偉大なる御成績を擧げ給へるなり。

モール氏は揚言して曰く「皇后陛下の御同情、その滄らせられざる御親愛、その高潔なる御思想等は一度皇后陛下に咫尺したる者の決して忘るる能はざる所なるべし」と。

一三三 公府西園寺公望の謹話

皇皇さまは、婦人の模範と申すべき方であつた。皇后さまは、歌はお上手だつたし、書もすぐれてお居でになつた。音楽の御趣味も深く、日本の古樂、管絃樂をも永く宮中に残したいといふ御思召であつた。ある時、宮中の御燕居の時に古樂があつたが、わたしに琵琶をひいてみぬかと仰せられたので、久し振りで、あのベロン／＼といふのを弾いた。琴を合奏したのは、宮中の伶人で、これはその道の専門家であつたが——御一新前には、お歌御人數、お樂御人數といふものがあつて、お歌御人數といふのは、今のお歌所寄人といふやうなもの、お樂御人數といふのは、伶人もあり、又公卿もあつた。私の家は、琵琶の方の御人數であつたから、子供の時に稽古して、時に正式に宮中で琵琶の役をつとめたやうに覺えてゐる。それで、明治天皇の時、わたしが總理大臣の時であつた折のことです。

天皇、皇后の御燕居に古樂があつたのです。其時、わたしにも弾いてみぬかと仰せられたので、ベロン／＼とひいたが、昔おぼえた事は不思議に忘れて仕舞はないもので、餘程怪しかつたがマアともかく出来たが——それが済んでから、わたしは「幼年の時分、琵琶の稽古がいやで勉強しなかつたしいやいやながら覺えたものも、今では忘れて仕舞ひました」と申し上げると、皇后さまがすぐに「あなたが琵琶を勉強されなかつたり、忘れてお仕舞ひになつたりした事が、今日、陛下の御用を爲されるのです」と仰せられたが、それが誠に自然に、上品に仰せられて、固より俗に謂ふ世辭といふやうなことには聞えない。普通なら、いや忘れるどころではない、誠にお立派です。位の事を仰せ聞けられても、婦人の挨拶としては相應はしいのに、琵琶を忘れる位だから、國の爲になるといふ、まるで違つた方角からおほめを蒙り、而もそれが誠にわざとらしくない御口氣であつた。マア日本の上流婦人と限らず、一般の婦人にも模範を垂れたお方である。……

二四 結

び

以上は、昭憲皇太后の御事蹟と御坤徳の一端である。その麗はしき御容姿と麗はしき御心とは洵に日本女性の典型として、その最高の發達を思はしむる。私は皇太后宮を仰ぐごとに、日本女性の優秀なる素質を思はざるを得ないのである。

我が國には古來から優秀卓越せる女子を多く輩出してゐる。容姿の秀でたるもの、文藻の優れたるもの、才幹の卓越せるもの、はては武勇の傑出せるもの、敢て諸外國にも劣らぬ。まして皇室に於ては、明后賢妃その人乏しとしない。かの幽間貞靜の徳を以て周の文王を輔佐した太姒も特に稱するに足りないのである。これ等の明后賢妃の中にあつても昭憲皇太后宮は、特殊の御存在であらせられたことが拜せらる。皇太后宮には、かの狩獵の歸途舍人を誅せんとする 雄略天皇を止めたまひて、 天皇をして「樂しきかな人は皆禽獸を狩る朕は善言を狩り得て歸る」と仰

せしめたまうた皇后中蒂姫の凜乎たる御精神ありて、しかも直諫を上るといふごとき諍臣的趣はない。若し皇太后宮に匡翼の諫言ありとすれば、それは春風の薫するがごとき自然のものであらせられたのである。

皇太后宮は、藤原氏の出たるに於て、その謙讓恭儉にして内助の功多きに於て一條天皇の皇后彰子に類したまふものがある。しかも皇太后宮には、彰子の父御堂關白道長公の皇威を凌ぐ勢威を見るの御不幸はあらせられなかつたのである。

いま若し、史上に於て類似を求むるならば、聖武天皇の皇后、光明皇后であらう。皇后は體貌殊麗、光耀あるに似たるを以て光明皇后と名づけられた。天資慈仁雅閑禮訓あり、書を善くし、又文を屬すといふは、そのまま昭憲皇太后宮に擬せらるることと思ふ。しかも、皇太后宮には光明皇后の悲田・施藥兩院を置きて、天下の飢病を療養するといふ限りなき仁慈の資あり、また佛道尊信のことあるも、佛寺堂塔建立のことなく、しかも、我が固有の 皇祖皇宗の道を崇信したまふこと皇后に倍するものがあらせられたのである。

皇太后宮の容姿・才能・學問等は、古今の烈婦賢婦と稱するものを凌駕したまうたが、それ等

の人々の陥り易き虚飾、街氣といふときは有したまはなかつた。飽まで誠實であらせられた。國事を念とすること皇太后宮のごとく、國政を理解すること皇太后宮のごとくして、しかも謙讓にして國政に容喙したまはざること皇太后宮のごとき御方は他にあつたであらうか。皇太后宮の明治天皇に對するは全く影の形に添ふのごとく、ただ一にその形を完ふせしむるにつとめたまうた。かくて宮府の別肅然として正しきを得。天皇をして立憲的聖主たるを得しめたまうた。

思ふに、皇太后宮をしてかくのごとくならしめたまうたものは、その容姿、才能、學問が、特にすぐれさせたまうたといふよりも、その幽間貞靜の坤徳が遙かに優るものがあらせられたからであらう。皇太后宮が日本女性の最高典型として仰がる所以はここにあるのである。皇太后宮はその殊麗なる御容姿と御才能學問とを以てしたまひ、その限りなき明治天皇の御愛と恵とに浴し、御内助の功を全ふして國民崇敬の的となりたまうたにも關はらず、終生、自から足らずとして學問に勵み修養につとめ、智を磨ぎ、徳を進むるに及ばざるを憂ひたまうたのである。その謙虚の御精神、進徳の御努力、それは決して常人の能くするところでない。

皇太后宮は、かの豊麗なる御文藻と御筆蹟をもたせられながら毫もこれに満足したまはず、

人なみにふむとはすれど敷島の

道の廣さにまどひぬるかな

(明治二十二年)

筆とらぬ日はまれなるを書く文字の

など人なみにおくれたらむ

(明治三十四年)

と、仰せられ、若し父在まさはと思ひ家庭の慈訓を回顧したまふて

たらちねのおやのいまさは今も猶

いさめらるべき筆のあとかな

(明治三十三年)

ふでとりていろはならひしそのかみは

よくかゝむとも思はざりしを

(明治三十九年)

と、思慕と悔恨の情とを寄せたまうたのである。皇太后宮の御歌、御文字の特にすぐれさせたまうたのは、その天稟の御才能に、この謙虚の御精神を以て、御精勵あそばされた爲ではあるまいか。

皇太后宮は、御孝心の深きを以て知られた。皇后宮の尊位に上り、天皇の御恵に浴しながら、

一日と雖も亡き父を忘れたまうたことはなく、宮中にあつては英照皇太后宮、御實家に於ては一條順子に御母としての孝養を盡したまうた。それは誠に御手厚きものがあらせられた。しかも常に孝養の足らざるを憂ひたまふたのである。

はゞそばの恵の露をうけながら

子の道はまだつくしかねつゝ (明治三十八年)

と、仰せられ、益々御孝養を勵みたまうたのである。その情は 明治天皇に對しても同一であらせられた。

おほけなき君が恵のかしこさは

忘るゝまなし老いにける身も (明治四十三年)

と、常に御恵に感謝しつつも、しかもこれに酬むるゝことの足らざることを常に痛みたまひ、省みたまうたのである。

君を思ふちひのおもひのひとつだに

つらぬきかぬるわれやなになり (明治三十三年)

かくて常に御心を引きしめ、過失なきやうにと萬事に御注意あそばされたのである。

大空もはかりしる世を浮雲の

まよひがちなるわがこゝろかな (明治二十一年)

あやまたむことをおもへばかりそめの

ことにも物はつゝしまれつゝ (明治三十四年)

かくて、皇太后は常に感謝報恩の念を以て、寸毫もその尊位に誇り、或は驕りたまふことはなく、進徳にいそしみたまうたのである。

よの中にあふがるゝ身を位山

のぼるにつけて忘れざらなむ (明治三十三年)

かやうな、皇太后宮の御進徳、御精勵は御若きときだけのことにあらねば、御中年或は御晩年のときだけのこともあらせられなかつた。前記の御歌は多く御中年以後に拜せらるるが、明治十二年及び十四年にも、次の御歌が拜せらるるのである。

人しれず思ふこゝろのよしあしも

照し分くらむ天地のかみ

獨對孤燈

くらからぬ道をたづねて窓のうちに

獨かゝぐるよはのともし火

烈々たる求道の御精神を拜するのである。思ふに 皇太后宮は、くらからぬ我が皇國日本女性の大道を求めて、その六十五年の全生涯を終りたまうたのである。その大道は誠の道であり、皇祖皇宗の道であつたのである。ここにも、明治天皇と全く御同一であらせられたことが拜せらるるのである。

真心をぬさとたひけて神壇に

いのるは國の榮なりけり

神風の伊勢の内外の宮柱

ゆるぎなき世をなほ祈るかな

(明治二十年)

(明治二十四年)

かくて、皇太后宮は、この祖宗の大道の赫々として輝き出でたる明治維新を祝福し、明治の盛治を謳歌したまうた。

昔よりためしもさかぬ大御代に

うまれあへるぞうれしかりける

(明治三十六年)

とは、御衷心の歡びであらせられた。若し、この盛治を蔽ふものあらば斷々乎として排撃せねばならぬ。

茂りたるうばらからたち拂ひても

ふむべき道はゆくべかりけり

(明治二十二年)

といふ烈々たる御精神となつてあらはれたのである。かくて、日清日露戦役に於ける獻身的の御精勵となつたのである。皇太后宮の丈夫も及ばざる勇壯なる御歌はかくてあらはれ、國民の意氣を鼓舞し、作興したのである。

たのもしき何はあれどもたゝかひに

かたではやまぬ大和だましひ

(明治三十七年)

と詠じたまへば、また

戦の友のかばねをふみこえて

すしむこしるや苦しかるらむ

(明治三十七年)

と詠じたまうた。かくてそれは

君をおもふ誠ひとつにたしかみの

にはにも民のすしむ御代かな

(明治三十七年)

といふ國民の御信頼ともなりたまうたのである。皇太后宮の崩御あそばされて、既に二十九年我が國は、今や大東亞の建設に國運を賭して戦ひ、國民は君を思ふ誠一筋に、一切を犠牲に供して顧みるところがない。このときに於て、私が遙かに思ひを皇太后宮に致し、この小篇を謹述するの微意は徒に史的懐古の満足のみではない。皇太后宮の御精神に、御坤徳にこそ、我々の今日求めんとして得ざるものが拜されることを信ずるからである。大東亞建設の理念、新秩序への國民的用意、いづれか皇太后宮に求め得ざるものがあらうか。それは五千萬皇國女子のみの求むるものでなく、更に五千萬の男子も求むるものである。(昭和十七年六月二十七日脱稿)

認 承 協 文 出
あ 160042

昭和十七年九月二日 初版印刷
昭和十七年九月六日 初版發行

(三、五〇部)

定價 三 圓

一昭憲皇太后宮の御坤徳一奥付

著 作 者

渡邊 幾治 郎

發 行 者

大井 徳三

印 刷 者(東京四二)

山 縣 精一

配 給 元

日本出版配給株式會社

東京市神田區神保町三九

新 興 社 印 刷 所

發 行 所

(日本出版文化協會) 一二〇〇二八

株式會社

東 洋 書 館

東京市麹町區九段一ノ一二

電話 九段 四八四九

編 替 東京 一七〇三六三

明治維新と現代日本

渡邊幾治郎著

A 5判上製
價二・五〇送20

本書は常に新しく恒に生々しき問題と教訓とを包蔵する明治維新の重點を、情勢・人物・思想・行動の各般に亘つて冷靜に解明し、此の歴史過程を通じて現代日本の歴史性を達観せんとせる著者の眞摯なる精進の所産である。

明治維新運動人物考

田中惣五郎著

A 5判上製
價二・八〇送20

本書は幕末維新人物研究者として著名なる著者の最も異色あり且つ多面的なる人物史論の集大成である。特に維新運動の靜的觀察を排して動的に之を把握せしめ歴史の眞率なる姿を解明せる貴重なる文献である。

國難日本歴史

白柳秀湖著

B 6判上製
價一・五〇送20

日本民族の特殊性は日本の對内・對外の國難克服の史的過程に於てのみ正しく把握され得る。本書は試練の幾山河を踏み越え來りし上古以來の我が民族の姿を示すと共に今日及び明日の日本を指向せる驚嘆すべき歴史書である。

餘

裕 (歴史隨筆)

上司小劍著

B 6判上製
價一・八〇送20

此の書に描かれたる人間の眞、清冽靜謐な東洋的生活姿態、歴史の激浪を生き抜きし數々の日本女性の本來的な麗さ、また今日の非常時代に反省さるべき生活の機微といふものは人をして焦燥の世界より解き放つであらう。

936
98

8)

終